

令和7年度

茅野市非核平和事業

「非核平和作文コンクール」最優秀作文集



令和7年8月

茅 野 市

はじめに

昭和20年8月、広島・長崎が原子爆弾によって受けた被害は非常に大きく、そこで暮らしていた多くの人たちの尊い生命が奪われました。かろうじて生き残った人たちも、原爆のため体と心に大きな傷を負い、80年たった今も原爆の傷は消えません。

世界で唯一の被爆国の国民として、茅野市は昭和59年6月、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を祈念して「非核平和都市」を宣言し、毎年、非核平和への取り組みを行っています。

その中で、私たちは、原爆パネルや被爆者の描いた絵を見て、原爆や戦争の恐ろしさと平和がどんなに大切かということ学びました。

しかし、誰もが平和を願いながらも、今も世界中で戦争や紛争が続いていて、悲しい思いをする人たちは後を絶ちません。そして、今も世界中に核兵器が存在しています。

今、私たちはこれまで学んだことをもとに、本当に平和な世界を、みんなで力を合わせて築いていかなければならない、と思いを新たにしました。

そして、まず自分たちでできること、それは、この平和学習をただ「怖かった」という感想で終わらせるのではなく、次につなげるために、たくさんの人たちが悲しい思いをして亡くなったということ、そのことをきちんと受け止め、語り継いでいくことだと強く感じました。

ここに、今年、非核平和に対する思いを市内の中学2年生がつづった「非核平和作文コンクール」の最優秀作文をまとめました。

目 次					ページ
永明中学校	2年1部	川崎 空	知る事の大切さ…		2
〃	2年2部	須藤 美波	明日への願い		4
北部中学校	2年1部	柳澤 茉央	「引き継いでゆく」べきもの		5
〃	2年2部	細川 さくら	当たり前のような日々のありがたさ		6
長峰中学校	2年1組	向井 舞依	平和な世界になるために		7
〃	2年3組	北原 陽菜	同じ空の下で—		9
東部中学校	2年3組	橋場 信斗	私の願い		10
〃	2年4組	小澤 颯太	世界が平和になるためには		11
平和への誓い（令和7年広島平和記念式典より）					13

「まだ生きていたい」「こんな世界はもう嫌だ」そんな思いを声に出せないままこの世から去って行ってしまった。多くの人の命を奪った原爆。それは、私たちと同じくらいの年の子や、私たちよりずっと若い子たちの命も奪っていった。原爆とは何かを知っていても原爆の恐ろしさは経験出来ないし、経験した人の苦しみや辛さ、痛み、恐怖心を実際に知る事は出来ない。けれど、今回、非核平和学習で原爆について詳しく調べる機会があった。そこで私は、想像していた何倍も恐ろしい出来事を知る事になった。

「ウォー」空襲警報が鳴った。町中に響き渡る大きなサイレン音。必死で逃げ続けていたその瞬間、「ピカーン」と目が開けられないくらいの光が差し込んできた。あまりの熱さに耐えられず、ほとんどの人が命を落とした。その中には、2000度以上の熱さによって皮膚が焼け、全身に大やけどを負った人や、熱さに耐えられず水を求めて川へ飛び込んで亡くなった人、自分の目を失った人など、今では信じられないような事が写った写真を目にした。亡くなってしまった人のほとんどが、逃げようとしている体勢のまま亡くなっていたという事も知った。また、全身に火傷を負った人や、目を失った人も生きるために自分の足で病院まで歩いて行き先生に治してもらおうとするが、あの多くの人の命を奪った原爆のせいで病院の先生たちも亡くなってしまっていて、人手が足りない状況でもあったそうだ。もちろん、ヒロシマのほとんどが焼け野原となったため、食べる物もない、何もない苦しい状況で生きていくしかなかった。黒い雨に打たれた人は病気に悩まされ、きっと私たちには分からないくらいの痛みや辛さを経験したのだろう。このような話を聞いた中でも、私が特に印象に残っているのは、禎子さんという一人の少女の話だ。禎子さんは二歳の時に被爆し、黒い雨に打たれて放射能の影響で白血病になり、十二歳という若さでこの世を去ってしまった少女だ。私たちとほとんど変わらない年の子が、どうしてこの原爆や戦争で命を落とさなければいけなかったのだろうか。きっと今の私たちと同じように、夢も希望もこれからの長い人生もあったはずだ。もし私が戦争をしていた頃の日本に生まれて生活していたとしたら、本当に想像できないほど残酷で恐ろしく、言葉に出来ない状況だと感じた。

私は家に帰ってから家族に非核平和学習で知った事を話した。すると、亡くなった私の曾祖父が被爆者手帳を持っていた事を母から聞き、自分の身近な人が被爆者だった事にとっても驚いた。詳しく知りたいと思い、祖父に電話してみた。「ヒロシマに原爆が投下されて数日後、汽車で家に帰ろうとしている途中でヒロシマに降ろされたんだよ。そこで一週間くらい被爆者の看病をしたり、焼け野原となったヒロシマの片づけをしたりしていたんだ。でも、そこで黒い雨に打たれて被爆者となってしまったんだよ。幸い帰ってきてから何もなく過ごせていたけど、おじいちゃんの口からはヒロシマの事についてはほとんど話してくれる事はなかったよ。二十年くらい前に胃がんで入院した時に初めて被爆者手帳の存在を知って驚いたんだよ。」それを聞いて私は、曾祖父が生きてくれなかったら私もこの世に生まれてこられなかったのだと思い恐怖心を抱いた。なぜ曾祖父は家族に打ち明けられなかったのだろうか。家族を驚かせたり、不安にさせた

りしたくなかったのではないか。ヒロシマで見たものを思い出したくなかったのではないか。私には、曾祖父の本当の気持ちは分からないが、少しでも良いから原爆について知ろうと思う事で、曾祖父の心に寄り添えたら良いなという気持ちが芽生えてきた事に気が付いた。

戦争や原爆という言葉を知っただけで怖いと思っていた私、焼け野原になった被爆地の映像や被爆した人たちの映像から目を背けていた私、戦争のない今の日本に生きている私、戦争を知らない時代を生きている私たちには関係ない事のように思っていたけど、この学習を通して自分の身近な人が原爆によって苦しい思いをしてきた事を知り、私たちにも知る必要があると強く感じた。戦争を経験した人たちが亡くなっていつの間にか、私たちに出来る事は、知る事だと思う。もう二度と同じ事を繰り返さないためには語り継いでいく必要がある。もし、私に子どもが生まれたら、昔の事だからではなくて、ちゃんと戦争や原爆で何があったのかをしっかりと教えたい。そして、曾祖父や戦争で苦しい思いをした全ての人の思いと共に、私はこれからも生きていきたいと強く思う。

熱く、眩しい光が広島を覆った。その瞬間激しい爆発と共に当たり前だった生活が吹き飛ばされていった。綺麗な川が赤く染まり、人が居た場所は影だけが残った。これは、1945年8月6日にアメリカが広島に原爆を投下し、一瞬にして沢山の人の命が奪われた悲劇だった。

私は、この事実を聞いたとき、なぜそんなことが起きたのか、そしてどうして人間はそんなに酷い武器を作ってしまったのかと、深く考えさせられました。今まで当たり前のように迎えていた明日がその爆弾一つで失われてしまう。今ではとても考えられない現実がそこにはありました。例えば明日を迎えられたとしても原爆により、病気や怪我で次の明日は迎えられるのか分からない。と言う不安、緊張があったのかなと思いました。生き延びても大切な家族、友達を失い、生きていく気力が私だったらないと感じました。原爆のことを学ぶ前までは、平和について深く考えたことがありませんでした。毎日学校に通い、友達と遊び、家族とご飯を食べ、明日を迎える。そんな当たり前のことが、実はとても幸せなことだと気づかされました。もし戦争が起きたら、その当たり前の毎日がすぐに壊れてしまうのです。私たちは、広島で起きたことを忘れてはいけないし、未来に伝えていく責任があると思います。

私は中学生で、世界のことをすべて理解しているわけではありません。けれども、「戦争はしてはいけない」「人の命はとても尊いものである」ということは、よく分かります。そして、平和であることは当たり前ではなく、人々の努力でできたものであり、みんなで協力して守っていくものだと思います。

広島の人々が原爆の体験を語り続けてくれるのは、私たちのような戦争を知らない世代の人にそのことを伝えたいからだと思います。

また、今も世界には核兵器を持っている国があります。広島で起きたような悲劇が、また別の場所で起こるかもしれないと思うと、とてもこわくなります。人間はなぜ、同じ過ちを繰り返してしまうのでしょうか。武器や力で相手を支配するのではなく、話し合いで解決することができれば、争いはなくなるはずです。だから私は、国どうしが対立するのではなく、協力し合って仲良くしていくことが一番大切だと思います。

これから私は、広島や原爆について学び続け、平和の大切さを忘れずにいたい。そして、まわりの人にもその思いを伝えていけるような人になりたい。一人ひとりの思いが集まれば、大きな力になります。私もその一人として、この「当たり前の平和な毎日」が、これからも続くように広島で起きた悲劇をこれからも忘れず、戦争でなくなる命をなくし、明日を沢山の人が迎えられるよう願い続けていき、未来へ繋げていきたいと思っています。

「原爆」という言葉を聞いた時、一番最初に思いつくのは、どんなことだろう。多少差はあれど、ほとんどの人が広島を思い浮かべるのではないだろうか。広島は第二次世界大戦末期の昭和二十年八月六日、日本時間午前八時十五分、人類史上初めて原子爆弾が投下された地である。

学校でも、当時のヒロシマの映像を見たり、広島原爆ドーム等について学ぶ機会が多くあった。そして、原爆について調べていくうち、長崎にも広島と同じように爆弾が落とされていたことを知った。そのとき、ふと思った。すなわち、「長崎も広島と同様に被爆地でありながら、なぜそのイメージが広島よりずっと弱いのだろうか」ということ。広島には原爆ドームや資料館など、当時のことを知る手がかりが多くあるのに対し、長崎は、現存している建物がある様子もない。ならば、被爆したのがごく一部であったのか。ところが二つの違いについて追究していくうち、長崎に投下された「プルトニウム爆弾」の方が、広島「ウラン爆弾」の約1.3倍の威力があり、爆発規模は広島より大きかった、ということが明らかになった。しかも、長崎の原爆についての記事を読みすすめるうち、また、一九五八年三月十四日まで「浦上天主堂」という建物があったことも知った。この建物は、なぜ後世に残されなかったのか。初めは、単純に「原爆での嫌なことを思い出したくない」という人が多かったから、そしてこの場所が元々教会だったため早く信仰の場に戻したかったからなのではないか、と考えた。ところが、当時の新聞記事などを見てみると、そもそも、建物をどうするか、という論争が激しく行われた痕跡がないのである。人々の関心がほとんどなかったことが、取り壊しを進める一つの原因になった部分もあるのではないか。いずれにしても、広島の人々と長崎の人々の被爆した建物についての考えは、大きく異なることが分かった。

広島の人々は、もう二度と、同じあやまちを繰り返さないための、戒め、象徴として。

長崎の人々は、原爆を思い起こす、早く、取り払わなければならないものとして。

どちらの考えが正しいかは一概にはいえない。誰が決めるものでもないだろう。だが、より後世に影響を及ぼすのはどちらだろう。広島に現存された原爆ドームは、見た者、聞いた者に少なからず残るだろう。それがどんどん伝えられていけば、原爆について考える人が少しでも増えるはずだ。一方、長崎の被爆した記憶は、それを覚えている人が減っていけば失われていってしまうように、私は思う。

今さら言っても、建物はもう戻らない。それでも、経験だけでも、少しでも後世に語りついでいくことが大切だと感じる。

「日本で被爆」したのは、広島と長崎の二つだ、ということ添えて。

当たり前のような日々のありがたさ

北部中学校 2年2部 細川 さくら

みなさんは、「平和」とはどんなものか考えたことはありますか。そして、どんなときに平和と感じますか。私にとって「平和」とは、戦争や争いごとがなく、人々が安心して暮らせる状態のことだと思います。私は、毎日友達と一緒に話して笑っているときに平和だなと感じます。しかし、私たちが当たり前のように過ごしているこの日常が本当に「当たり前」なのかを考えると、そうではないことに気づきます。世界には今もお戦争などが続いている地域があり、多くの人々が平和を求めて苦しんでいるのです。

私が初めて「平和」について深く考えるようになったのは、小学校6年生のときに広島原爆ドームや平和記念資料館を訪れたときでした。展示されていた被爆者の遺品や写真、そして体験談の数々に大きな衝撃を受けました。特に、焼けた服、体にはどれも戦争のむごさを身近に感じさせるものでした。

資料館の中には、「自分と同じくらいの年の子が、原爆で命を落とした」という説明もあり、私はとても胸が苦しくなりました。「もし自分がその時代に生まれていたら？」と考えると、今こうして家族と笑い合い、学校へ通い、友達と遊ぶことのできる日々のありがたさを感じました。また、ニュースでは、ウクライナやイランなどでの戦争についての報道が続いています。爆撃を受けた町、避難する人々、涙を流す子どもたちの姿を見ると、「平和」はまだ世界中に広がっていない現実を思い知らされます。戦争が起きる背景には、民族や宗教の対立、経済的な問題、政治的な利害などさまざまな要因があります。しかし、どんな理由があっても、罪のない人々が傷つくことは許されるべきではありません。

私たち一人ひとりができることは限られているかもしれませんが、しかし、平和について考え、話し合い、小さな行動を積み重ねていくことが大切だと思います。たとえば、差別的な言葉を使わない、いじめを見て見ぬふりをしない、意見が違ってても尊重するなど、こうした日々の心がけ、人に思いやりを持って接することで、周りとの調和を生み、やがて大きな「平和」につながるのではないのでしょうか。

平和とは、「遠くにある理想の世界」ではなく、「私たち一人ひとりがつくりあげていく世界」だと私は思います。これからの時代を生きる私たちこそが、争いのない社会を目指して努力していく責任があるのです。そして、この平和な日常を未来の世代へと受け継いでいくことこそが、今を生きる私たちの使命ではないのでしょうか。

さいごに、私たち一人ひとりの小さな思いやり、行動の積み重ねが、平和な未来をつくる力になり、やがて大きな平和へとつながっていくと、私は信じています。

「幸せは当たり前じゃない」何回も聞いたことのある言葉ですが、私には実感がありませんでした。しかし、二年生になって広島・長崎に落とされた原爆の歴史について学び、今の生活のありがたさを実感すると同時に、本当にこんなことが日本で起こったのかと信じられない気持ちになりました。

戦争をしていた時代では、ご飯が十分に食べられなかったり、大切な人が亡くなってしまうことが当たり前のことのようにあったのです。学校に行って勉強ができたり、帰る家があったり、そのすべてが幸せということを知りました。私は今の生活でいやなことや悲しいことがあると、「もっと幸せになりたい」と思ってしまう。しかし、それは昔の人々が望んでいた「幸せ」だったのです。そこで私は、平和や幸せとは何かについて考えてみました。

一九四五年、八月六日に広島、九日には長崎に世界で初めての原子爆弾が投下されました。原爆が落とされた瞬間、すさまじい光が広がりました。建物がくずれ落ちてしまい下じきになってしまった人や、やけどで皮膚がただれ落ちてしまった人もいます。これまであった日常がたった一つの爆弾によってすべてなくなってしまったのです。放射能を浴びて後遺症が残ってしまった人や家や家族を失ってしまった人々が今も苦しんでいます。

私は原爆が落とされた時の様子や苦しんでいる人の様子を直接見たことはありません。ですが、当時の映像などを見て、とても悲惨なことがあったということは分かりました。そしてもう二度とこんなひどいことが起きてはいけなくと実感することができました。何の罪もない人たちが殺されてしまうのは絶対にあってはならないことであると同時にとても悲しいことだと思いました。そして、二度とこんなことが起こらないためにも私たちが語り継いでいくことがとても重要だと思いました。

私が平和や幸せについて考え、感じたことは二つあります。一つ目は、「今の生活に感謝すること」です。平和とは何かを考えることで、今の生活がどんなに幸せかを知りました。なので今の生活に感謝し、決して当たり前だと思わないことが大事だと思いました。

二つ目は、「昔に起きた出来事を忘れないこと」です。昔にあったことだと戦争を軽く見ていたら、また同じことがくり返されてしまいます。今、日本がこんなに平和なのは、昔あったことを忘れていないからです。もし忘れてしまっていたらこんなにも日本は平和ではないと思うし、これからも決して忘れてはいけません。そのためにも今年学んだことを私たちが忘れてしまわないでいきたいです。

未だに世界では、戦争が続いている国や地域があり多くの人々が戦争によって命を落としています。私は平和について学び、少しでもこういう人々がいなくなることを願っています。今、戦争をしている人々に広島、長崎であったとてもおそろしい原爆の被害について知ってもらい、命がどれだけ大切かを伝えていきたいです。そして、もう二度

と罪のない人々が戦争によって亡くなってしまうことのない、平和な世界になることを願っています。

平和という毎日がどれだけめぐまれているのかー。皆さんは考えたことがありますか？私は、深く考えたことがありませんでした。しかし、ここ数年、ウクライナ紛争、そしてパレスチナ紛争などの世界情勢を耳にする機会が増え、ニュースなどを見るたびに考えることも多くなりました。映像がうつしだされるたびに、恐怖と不安でおしつぶされそうな顔、子供を守ろうと決心する顔がそこにはあります。当たり前のようにご飯を食べて、学校に行って…私たちが、当たり前のように思ってしまう日常が壊され死となり合わせの日々を送っている人がいるのが現実です。そして、何も罪のない多くの人々が戦場に立たされ苦しんでいるのです。

日本もかつて、長いこと戦争をし、夢をもった多くの人々が戦っていました。私の祖父方のひいおじいちゃんもその内の一人でした。戦時中の様子を知るため、祖父に話を聞きました。現在のパプアニューギニアにあるラバウルというところに配属されたそうです。ラバウルの戦いは、第二次世界大戦中の一九四二年におこりました。ひいおじいちゃんは、まだ二十歳前後と若かったため、陸軍の通信兵として招集されました。主に、電話線や無線機などを通して、作戦本部に情報を伝える役割です。作戦中に情報伝達するので、時には命がけの作業もあったそうです。また厳しい環境なので食料不足も深刻だったそうです。私は、その話を聞いたとき、今の生活との差が大きすぎて信じられないというよりも想像ができませんでした。朝、昼、晩とご飯をおなかいっぱい食べられることがどんなに幸せか、ありがたいことか忘れてはいけないと強く実感しました。

それから、ひいおじいちゃんは、戦いから日本へと帰ってきましたが、戦時中の話は、あまり語らなかったそうです。しかし、戦争で体験した、「死ととなり合わせの日々」を忘れたことはないでしょう。どんなに苦しく悲惨な光景だったかは、正直、私には見当が付きません。それでも、多くを語らなかったひいおじいちゃんが祖父に話した戦時中の体験は、とても重みがあり、苦しい体験をしたからこそ伝えられることだと思います。戦争でたくさんの人が犠牲になりました。しかし、日本は戦争を乗り越え平和の道へと進んできました。今年で終戦から八十年の年月がたとうとしています。長い年月がたちましたが八十年前まで、私たちの住んでいる日本で戦争が行われていたことは事実です。この事実を必ず忘れてはならない、今の生活を当たり前だと思っではいけないということを改めて感じました。

しかし、今の世界では、戦争がおこっています。決して、他人事ではなく私たちと同じ空の下で同じ人間が戦っているのです。私たちの手で戦争を止めることは難しいかもしれませんが、今私たちができることは、八十年前の事実を未来に伝え、戦争という恐ろしさを世界に伝えるー。それが平和への第一歩だと思います。戦争は、一瞬で大切なふるさと命を奪ってしまいます。かつて戦争を体験した日本だからこそ、命の大切さ、平和の大切さ、戦争の恐ろしさがより分かると思います。私は、祖父から聞いた話を忘れずに「平和な未来」が実現することを信じて伝え続けようと思います。

同じ空の下で生きている人間が夢と希望をもって暮らせるようになるその日までー。

1945年8月6日8時15分広島に原爆が落とされました。僕は広島に80年前に原爆が落とされ、14万人の犠牲がでたことを、悲惨で残酷で最悪な大きな出来事だと感じています。

もし、原爆がなかったらどうだったでしょうか。14万人の死はなく、広島の街や周りにはもっと活気があふれ、日本は被爆国ではなかったはずです。そんな未来があったはずなのに、原爆というたった一つの爆弾が80年前にすべてを破壊しました。原爆は80年前の昔の街並みや、家族、普段の生活もすべてを破壊した絶対に許されない史上最悪の兵器です。そして、広島の家族や友人、親戚を失った人がものすごくたくさんいると知り、もし自分がそうだったら悲しいじゃすまないと思います。怒り、悲しみ、憎しみ、悔しさが一気にあふれ出て、一生背負うことになると思います。僕は小学2年生ごろから死について考えることが多く、家族がもし亡くなってしまったらとか、自分が死んでしまったらどうになってしまうのかということを考えることがよくあり、たまに恐怖で涙が出たこともありました。でも80年前は原爆のせいで、家族がなくなってしまうことが多くあるということが当時の人からしたら僕以上に恐怖があったと思うし、やはり原爆は恐怖の象徴であり、今も存在しているということが許せないです。

ニュースやネットで、今もアメリカやロシア、中国などの国が原爆やさらに強力な水爆を持っていると知り、どうして核爆弾を持とうとするのか毎回疑問に思います。自国の防衛のためなのか、自国の強さを示しているのかわかりませんが、核保有国は日本に原爆が落ちた時の映像や、それがどれだけ悲惨だったのか知らないのでしょうか？僕は現在も核を保有している国がいることが正直おかしいと思います。もし今のウクライナ戦争やイスラエル情勢などで核が使われたら、80年前の日本よりひどく残酷なものになるかもしれません。それを防ぐために被爆国に住む我々日本人が立ち上がるべきではないのでしょうか。核を作らない、使わないということを現代に生きる日本人が呼びかけていくべきではないのでしょうか。今、被爆された方や戦争を経験した方々が私たちにどれだけ悲痛でつらいものだったか伝えてくださっているように、被爆をしたことのない私たちでも何かできることがあるはずです。例えば、外国との交流があった時に日本の原爆の悲惨さを伝える活動や、核の危険性を伝えるといった活動を行うことで、核を作らない、使わない意識を高めてもらうことができます。ちょっとしたことで十分だと思います。でも、このような活動をしていかないと、どんどん核競争が起こってしまいます。もし世界のどの国も核を保有し始めてしまったら最悪です。

80年前の悲劇がまたどこかで起こることはがっては絶対に駄目です。なので私たちが核の保有を止めて世界を変えていき、平和な世の中にしていきませんか。それが私の願いです。

私は、これまで1945年8月6日・9日に落とされてしまった、原子爆弾のこと、それで被害にあってしまった人々のことについて勉強してきました。話を聞いて私が思ったことは3つあります。

1つ目は、原爆を落とされて悲しむ人は犠牲者だけではないということです。話を聞く前は、被爆してしまった人だけが、いつ亡くなるか分からない恐怖や、自分の大切な体の一部が変わってしまったことを悲しんだと思っていたのですが、話を聞いた後は被爆した人だけではなく、原爆によって亡くなってしまった人々を大切に思っていた、家族や友人なども大切な人が亡くなってしまう、変わってしまったというとても悲しみに苦しんでいたことがわかりました。

2つ目は原爆が落とされてから何十年も経ってから亡くなった人々もいたということです。白血病などは被爆してからすぐに発症するものだと思っていたのですが、被爆して何十年も経ってから急に発症し、亡くなってしまう人もいたという話を聞きました。家族を失った悲しみなどを抱えている人たちも、年月が経ち、やっと少しずつ安心して暮らしていける環境になっていく中で体の中では少しずつ体がむしばみ、何十年も経ってから急に体がおかしくなり亡くなった人たちは本当に可哀そうだと感じました。このことについても、家族や仲間が生き残り安心できるようになってきた中で、突然どん底に落とされるような気持ちにされたと思うと言葉では言い表せないほどのものすごく悲しいことだったのだろうと思いました。また、原爆は落とされた後だけではなく、何十年も経って亡くなる人もいることを知り、やはり原爆は恐ろしい兵器だと思いました。

3つ目は生き残りはしたけれども大切ないろいろなものを失ってしまった人もいたということを知ったことです。これは平和学習を通して思ったことだけではないですが、爆心地にいなかったが、帰ってきたら家が吹き飛んでしまっていた人や、原爆では何とか生き残ることはできたが、ガラスや破片、原爆の光などで目が失明してしまった人、原爆の熱などにより、大やけどを負ってしまった人、原爆により、親や親族を失い、帰る家や頼れる人がいなくなってしまう、戦争孤児になってしまった人などがいることも知りました。

このような話を聞き自分が感じたこと、それは戦争での原爆投下をこの二回だけにし、これ以上悲しむ人を減らしたいということです。どうすれば良いのかと言うと、もう起こってしまった原爆投下という事実は変えることはできないため、これからどうしていくかを真剣に考える必要があると思いました。まずは戦争がなくなることが1番だと思うのですが、今の世界で起きている数々の戦争のように、戦争は権力者がいる限りどうしても繰り返されてしまうのです。ですが、原爆や戦争をなくすために努力している団体が世界各地にいることも確かです。確かに、1つの団体が、どんなに力を出したとしても地球規模でみるとたったこれっぽっちにすぎません。ですが、世界各地の団体だけではなく、戦争を少しでも減らしたい。無くしたいと感じている人たちをできるだけ沢

山集めて会議などを行い、被害者側の国などを支援したり、戦争を企んでいる、行っている国などに経済制裁などをしたりすることで少しずつ加害者側の政府を減らし、原爆だけではなく、戦争自体を減らすこともできると思います。つまり、1人では変えられない現状をたくさんの人で協力し、みんなで現状を変える必要があるということです。今まで起きてしまった戦争はもう、どうすることもできないけれど、それを教訓とし、これからどうしていくか、繰り返されることをどうすれば防ぐことができるのかをみんなで考えることが原爆、また、戦争を無くす上でとても大切なことだと思いました。

平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。
同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。
昭和 20 年（1945 年）8 月 6 日 午前 8 時 15 分。
この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。
誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。
涙とともに止まらない、絶望の声。
一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から 80 年が経つ今、
本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、
直接話を聞く機会は少なくなっています。
どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、
記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。
大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心を持つこと。
多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。
一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、
傷つき、悲しい想いをする人がいなくなるはずです。
周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、
いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができます。
大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。
あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、
私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和 7 年（2025 年）8 月 6 日

こども代表

広島市立皆実小学校 6 年 関口千恵璃
広島市立祇園小学校 6 年 佐々木 駿